

感染症とワクチン



2012.6.6
八重山病院 内科
津霸 実史

感染症ってなに？

- バイ菌が体内に入り、発熱などの症状がある状態。感染してから症状がでるまでの期間は、バイ菌の種類により異なる。

保育園は感染の危険性が高い！

- 乳幼児は体力がなく、免疫力も低い。
- 接触が濃厚なため、集団感染しやすい。

乳幼児の特徴的な感染症

病名	伝染性
インフルエンザ	特異的？E
麻疹（はしか）	伝染性？E
麻疹（三日ましか）	麻疹がなくなるまで
水痘（かさねそう）	すべての発疹がかさねたなくなるまで
百日咳	咳がよくなるまで
咽頭炎（のどかぜ）	症状がよくなるまで
流行性耳下腺炎（おたふくかぜ）	症状がよくなるまで
流行性角結膜炎（はやり目）	両眼において発熱のおそよぶいと感じられるまで（通常発症は1週間）
流行性結核菌症（アトコ）	両眼において発熱のおそよぶいと感じられるまで
手足口病	発熱なく、本人の自覚症状がなくなるまで
伝染性軟疣（おこり）	発熱発疹の無い場合や、発熱した場合は発熱がなくなるまで

・上記以外の病名は園舎の移動によって、園舎禁止用門を設けていた場合のみです。

乳幼児の特徴的な感染症

これらの病気の初期症状は、発熱だけのことが多く、経過を見てもないと診断がつかない。

乳幼児の特徴的な感染症

37.5℃以上の発熱があり、感染する病気が疑われる場合は登園を控えるのが望ましい。

風邪くらい大丈夫？

- 風邪をこじらせると様々な合併症を生じる。
- 副鼻腔炎、中耳炎などは比較的軽症だが、髄膜炎、肺炎、心筋炎、などの命に関わる病気になることがある。

風邪くらい大丈夫？

- ほとんどの風邪の原因菌はウイルスで、抗生剤を必要としないが、細菌感染症を併発すると抗生剤が必要なことが多い。
- 子どもの頃から何度も抗生剤を使用すると、耐性菌が出現するので、必要時以外は使用しない。
- 風邪のひき始めにしっかり休養をとって治す方が良い。

発熱の対応

子どもの病気 ～症状と対応～

発熱の対応

- 一般に37.5℃以上を熱があるとする。
- 38.5℃以上できつそうなときは解熱剤を使用する。
- 体がバイ菌と戦うために、38℃前後の発熱は必ずしも下げなくて良い。
- 熱の高さよりも、全身状態の評価を優先する。
- 42℃未満では熱で後遺症を残すということはない、と言われている。

下痢・嘔吐の対応

- 下痢や吐物の性状を確認する。血便に注意（腸重積）。
- 脱水症にならないようにする。口から飲めていれば様子を見て良い。（イオン水など、ミネラルと糖分が入っているもの）。必要に応じて吐き気止めの坐薬を使う。
- 症状の勢いが水分摂取に勝るようなら、病院で点滴を受けた方が良い。

発疹の対応

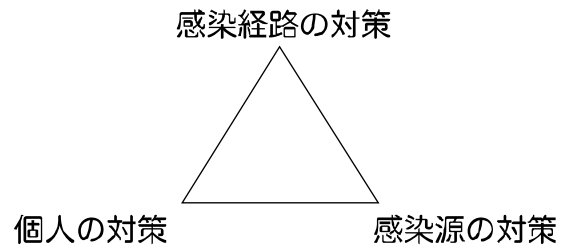
- 発熱＋発疹は感染しやすい病気の可能性が高いので絶対に保育園には行かせない。
- 3週間以内で、同じ症状の人との接触は？
- 早めに小児科医に見せた方が良い。事前に連絡を。

こんな時はすぐ受診



- ぐったりして意識が悪い。
- 呼吸が苦しそう。
- 水分を飲まない。飲んでもすぐ吐く。
- 全身のじんましん。
- けいれんが5分以上続く。
- ボタン電池、タバコの吸い殻を飲み込んだ。

感染症の防ぎ方



感染の仕方は病原体で異なる

- 空気感染** 同じ部屋にいると感染
- 接触感染** 患者との直接接触、遊具などによる間接触
- 飛沫感染** くしゃみや咳によって。約1m

感染の仕方は病原体で異なる

- 空気感染** 結核、はしか、水ぼうそう
- 接触感染** とびひ、アデノウイルス、風邪や腸炎のウイルスなど
- 飛沫感染** 風邪のウイルス、風疹、インフルエンザ、おたふくかぜ

感染源の対策

- 患児の隔離。なるべく登園を控えさせる。
- 患児の排泄物の適切な片付けと消毒。
- 施設内の衛生管理。

免疫力を高める

- 栄養のある食事、十分な睡眠、手洗いをを行う。
- 受けられる予防接種は出来るだけ済ませておく。

免疫力を高める

- ・保育士も必要な予防接種を受ける。発熱、発疹、風邪症状、下痢症状があるときは勤務を控える。
- ・こどもに関わる全ての人が禁煙する。タバコは、こどもの免疫力に悪影響。肺の病気、虫歯、精神遅滞など、百害あって一利なし。

保育士が接種すべきワクチン（案）

- ・麻疹、風疹、おたふく、水ぼうそう
- ・B型肝炎
- ・インフルエンザ（毎年）

ワクチンは
現代医療の最大の発明

ワクチン接種の目的

- ・病気にかからないように
- ・かかっても軽くすむように
- ・周りの人にうつさないように

ワクチンの種類

生ワクチン
不活化ワクチン

生ワクチン

- ・”生きた微生物”を発症しない程度に弱くしたもの。発症のリスクがゼロではない。